

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 25 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24510369

研究課題名(和文)近代日本の男性性構築におけるミソジニー・ホモソーシャル・ホモフォビア

研究課題名(英文) Misogyny, Homosociality and Homophobia; A historical analysis of Japanese modern masculinities

研究代表者

海妻 径子 (Kaizuma, Keiko)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：10422065

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本においてミソジニーは、女性排他的な職業世界に生きていたエンジニアや上級海員のような上層技術労働者層男性との結びつきよりも、ホモソーシャルの確認を通じなければ構築に困難をともなう都市新中間層の男性性と強く結びついていた。また明治(近代初期)よりも、大正末期から昭和初期にかけての(民族主義的)国家社会主義運動の高まりの中で、一度は包摂した女性を社会運動から排除していくイデオロギーとして機能した。しかしそのような社会運動の行動主義化・青年運動化に、宗教的禁欲主義と結びついたホモエロティシズムが明確に可視化されていない点に、ドイツやイタリアにおける青年運動との相違がみられた。

研究成果の概要(英文)：In modern Japan, the middle class office workers embodied their masculinity more misogynous than the highly skilled industrial experts' masculinity. The male office workers were so threatened by the competition with female co-workers for the jobs, that they needed to reinforce their homosociality to defeat female. Especially, misogyny was emphasized in the national socialist movement from the end of Taisho era. Many male socialist who had encouraged female activists was influenced by the nationalism and misogyny. They put the clock back and eliminated female activists. Such misogynous nationalism was also seen among youth movement including Youth-League of modern Germany or modern Italy. Although such Youth-Leagues were often blamed for their homo-erotic atmosphere, Japanese misogynous nationalists took more uncertain attitude toward homosexuality. So it is hard to find homophobia clearly in the Japanese discourses on homosociality.

研究分野：ジェンダー

キーワード：男性史 日本史

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は平成19年度～平成22年度の基盤研究(C)「近代日本の兵士の男性性構築のジェンダー・ポリティクスと〈女性〉のエージェンシー」において、以下のような知見を得ることができた。

(1) 植民地開拓事業および農村における女性の男性性言説において、「家庭」の「明るさ」という概念が、男性性構築に重要な役割をもっていること。ここにおいては必ずしもあからさまなミソジニー(女性嫌悪)は必ずしもみられない。他方で、植民地事業と男性性との関連について蓄積があるイギリスの先行研究などと比較した場合、ホモソーシャル(女性排除的な男性紐帯)の存在が必ずしも明確ではなく、この点については分析対象資料を増やして、さらなる検討が必要であること

(2) 植民地事業の遂行にともなう、自己犠牲的な男性性の構築にあたっては、イギリスなどにおいて敬虔主義が果たした役割を、日本においても仏教・神道等が果たした可能性は捨てきれないものの、むしろ特定の個人(年長男性)に対する心酔が強くみられており、この点について今後の研究を通じてさらなる掘り下げが必要であること。

植民地事業と男性性との関係性において「家庭」イデオロギーが果たすアンビバレントな役割については、John Tosh による *Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain; Essays on Gender, Family and Empire.* (Pearson Education Ltd. 2005) や Trev Lynn Broughton & Helen Rogers の編による *Gender and Fatherhood in the Nineteenth Century.* (Palgrave Macmillan, 2007) 等でも指摘されているが、これらの研究の知見と比較して上記(1)および(2)の点が明らかになったことは、近代的男性性の構造、特にホモソーシャルの形成のしかたに、日本の特徴を見出し得る可能性を示唆するものであった。

すなわち「近代日本の兵士の男性性構築のジェンダー・ポリティクスと〈女性〉のエージェンシー」よりもさらに分析対象資料を増やし、近代日本の男性性の構造の全体像を明らかにする。その際に、男性性の構造を、ホモソーシャルおよびその反作用としてのミソジニーとホモフォビアの、3つの軸に沿って構築されているものととらえて、その構造の日本の特徴を把握する必要性が、確認されたのであった。

## 2. 研究の目的

前項でも述べたように、本研究は近代日本の男性性の構造を、ホモソーシャルおよびその反作用としてのミソジニーとホモフォビアの、3つの軸に沿って構築されているものととらえて、その構造の日本の特徴を把握することを目的とするものである。具体的には、

大正期から昭和初期にかけての都市新中間層における男性性の構造を、当時増加していた俸給生活者向けのメディア(雑誌、新聞、修養読み物など)の男性性言説分析を通じて把握する。

分析にあたっては、収集した男性性言説を、(a)ミソジニー(女性嫌悪)、(b)ホモソーシャル(男性紐帯)、(c)ホモフォビア(同性愛嫌悪)の3つの軸に沿って分類・構造化し、その特徴を探る。

その上で、都市新中間層男性とは対抗的な男性性を構築していたと考えられる、工場労働者および植民地開拓事業参加者の男性性言説も収集し、構造を同様に(a)～(c)の3つの軸に沿って分類・構造化する。そして両者の構造を比較し、(a)～(c)の各要素、特にミソジニーが男性性構築にもつ意味を考察する。

## 3. 研究の方法

(1) 都市新中間層俸給生活者向けのメディアとして、「近代日本の兵士の男性性構築のジェンダー・ポリティクスと〈女性〉のエージェンシー」においても分析対象とした『サラリーマン』誌をあらためて本研究の問題意識にそって分析しなおすほか、よりミソジニー・ホモソーシャルが明確に抽出可能なメディアとして『日本及日本人』誌、さらに社会主義右派政党(社会民衆党、社会大衆党など)や俸給生活者組合などの団体の機関誌、関連する新聞報道などの男性性関連言説を収集する。同様に、対抗的な男性性が示されているものとしての、工場労働者・植民地開拓事業参加者をめぐる男性性言説として、「近代日本の兵士の男性性構築・・・」研究でも分析対象とした『拓け満蒙』誌をあらためて分析しなおす他、上層工場労働者(エンジニア層)の雑誌として『工人』誌、また広義の植民地事業従事者層として、上層海上労働者層(いわゆる上級海員)向けの雑誌『海員』(全日本海員組合機関誌)を対象に、男性性関連言説を収集する。

(2) 収集した資料の男性性言説を(a)ミソジニー、(b)ホモソーシャル、(c)ホモフォビアの3つの軸に沿って分節化した上で分類し、各分節をデータベースソフトに打ち込んで整理した上で、そこにどのような構造がみられるかを検討する

(3) ミソジニーやホモソーシャル、ホモフォビアについてのフェミニズム・ジェンダー・クィア研究およびそれをういた男性性研究の最近の知見を取り入れるべく、英語圏の海外文献を収集し、理論整理をおこなう。

## 4. 研究成果

前項で述べた分析の結果、以下のような点が明らかとなった。

(1) ミソジニー出現の違いからみえるホモソーシャルの多様性

モダンガールや女学校卒の女性、職業婦人などへのミソジニーは、都市新中間層男性の男性性言説において強く存在する一方で、植民地開拓事業をめぐる男性性言説では、困難な植民地事業の国家的意義を理解し「明るい」「大陸の新家庭」を共に築くパートナーとなり得る者として女学校卒女性を排除しきることが困難であったため、都市新中間層男性の男性性言説ほどの明確なミソジニーの存在が確認できなかったことは、先の「近代日本の兵士の男性性構築・・・」研究においても確認されていた。この点について本研究において、分析対象を上層工場労働者（エンジニア層）向け雑誌『工人』誌と、上層海上労働者層（いわゆる上級海員）向け雑誌『海員』にも広げて検討したところ、都市新中間層男性の男性性言説ほどの強烈なミソジニーは確認できなかった一方で、「新家庭」を共に築くパートナーとしての女学校卒女性に対する期待や憧憬も明確には確認できなかった。

エンジニア層・上級海員層ともに、実際の婚姻相手として女学校卒女性は、とりわけ上層においては少なくなかったと考えられるが、女性が家族経営農業の一翼を担う者として位置づけられていた植民地開拓農業移民とは異なり、エンジニアや海員の世界において妻となる女性は男性の属する職業世界とは完全に切り離されていた。他方で、都市新中間層男性にとって職業婦人の増加は彼らの雇用に対する潜在的脅威であったが、エンジニアや海員の世界において女性はそのような競合者とはなり得なかった。

言い換えれば、都市新中間層男性のホモソーシャルが女性排除＝ミソジニーによって常に（再）確認／構築されるものであったのに対し、エンジニア層男性・上級海員層男性のホモソーシャルはミソジニーによる確認を必要としていなかった。女人夫や女沖仲士など彼らの職業世界と接触する女性労働者は、ミソジニーの対象としてではなくあたかも新奇な風俗をもつ異民族の女性のように、本質的に彼らのホモソーシャルの外部に位置づけられて認識されていた。エンジニア層男性・上級海員層男性の妻もまた、本質的に彼らのホモソーシャルの外部に位置づけられており、「夫の仕事」への理解を妻に一定程度期待した銀行員や教員のようなサービス業の都市新中間層男性や、家族経営農業のよき協働者たることを妻に期待した植民地開拓農業移民と比較しても、主体性ある女性へのアンビバレンツ（ベター・ハーフとしての主体性は期待しつつ、それが「家庭」の枠を超えて男性優位主義をゆるがしホモソーシャルを脅かすことは認めがたいという、矛盾）は、言説空間においてほとんど確認されなかった。

（２）日本主義におけるミソジニーの強化と右翼的労働運動・国家社会主義運動における

## 女性排除

日本主義というものは本質的にミソジニーを強化するものと考えがちであるが、明治期・大正初期の『日本及日本人』を分析するかぎり、その仮説は単純にはあてはまらない。初期の日本主義は国粹保存、すなわち日本文化の中に世界に通用する普遍的価値をもつものを見出し、その良さを再確認し継承していこうとする点に重点があり、その文脈に添い過度な欧化に傾かないかぎり、女子高等教育にも一定の理解を示すなどの面もあった。

それが徐々に変化するのは大正末期から昭和初期にかけてであり、要因としては宮廷和歌などの女性的要素を排除・周縁化した国文学史・国家神道の体系化の完成とそれを学修した世代による執筆活動の開始、労働運動への対抗策として政府・軍部の資金が右翼団体に流れたことによる、これら団体の言論活動の活発化、弾圧を受けての労働運動自身の行き詰まり、新旧中間層の取り込みをはかっていた「社会主義」離れ、コミンテルンに対する不信感による社会主義運動内における反共主義の高まり、などがある。

についてであるが、三井甲之や蓑田胸喜らによるミソジニー言説の展開がこれにあたる。上述のように当初は必ずしも女性排除的ではなかった『日本及日本人』の言説空間にも、この世代の登場によって急速にミソジニー言説が存在感を増していくことになる。

および についてであるが、労働運動にとって女工の組織化は重要課題であり、多くの組合が婦人部を設置し、無産政党もまた婦人部において女性労働者に向けてのパンフレット作成など、女性指導者の言論活動に一定のリソースを割いていた。しかし で述べたような理由によって労働運動右翼が国家社会主義へと傾斜していくと、次第に で述べたような右翼団体勢力との提携も生じてくる中で、日本主義（天皇主義）的要素の強調がおこり、青年行動隊のようなホモソーシャルな行動主義が称揚されていくようになる。またバス・市電などの交通機関労組右翼を基盤に結成された国粹大衆党のように、当初は車掌のような職業婦人も含めて組織化され、婦人部を設置していた右翼団体も、次第に婦人部を撤廃していく。社会大衆党右翼も、国家社会主義政党への転身を進めていくあいだに、当初置かれていた婦人部は消滅していく。

このような（民族的）国家社会主義運動における女性排除と、愛国婦人会や国防婦人会のような、女性動員の仕組みの隣保組織的拡がりとは、どのように並存することができたのか、あるいはどのような軋みを生じていたのかを、今後より深く検討する必要があると考えられる。また、昭和前期の日本主義運動の中でも、下中弥三郎のような大衆雑誌社を基盤にもつ場合は、『維新』誌には何人もの女性記者が執筆しているなど、運動の中に女性の（言説）活動を組み込んでいる。したが

って昭和前期の日本主義運動におけるミソジニーについて、より分析対象をひろげてのさらなる検討が必要になると考えられる。

(3) 宗教的禁欲主義と結びついたホモエロティシズムの、日本における不可視性

ドイツ青年運動などには、宗教的禁欲主義と結びついたミソジニー(ヘテロセクシュアルな欲望に対する蔑視)とホモソーシャルの称揚があり、しかしそのホモソーシャルはしばしばホモエロティックなものともみなされ、その結果、突撃隊に対する肅清に象徴されるような、男性集団に対するホモフォビアにもとづいた弾圧がみられていくようになる、との指摘が先行研究においては行われてきた。

その点に関して特徴的であるのは、本研究において分析対象とした言説空間においては、このような宗教的禁欲主義と結びついた男性集団のホモエロティシズムについての言及と、それに対してのホモフォビアの表明が、明確には見られないことである。ただしこの点については、より明確な宗教的禁欲主義がみられると考えられる、愛郷塾や国柱会などの団体の刊行物が分析対象に入っていないためとも考えられるため、この点についての分析は、まとまった所蔵がなされていないこれら団体の刊行物の収集の方策も含めて、今後の大きな課題である。しかしながら少なくとも、本研究で分析対象とした都市新中間層男性向けからエンジニア層・上級海員層男性向けにいたる、広範な言説空間において、愛郷塾などの男性集団に対するホモフォビア言説が可視化されていないことは特筆すべきであろう。

考えられる理由のひとつは、日本における行動主義的青年運動において愛郷塾的な団体はむしろ例外的であり、全体的には行地会のような、政治家や警察とも結びついた任侠系団体の方が多数派であったことが指摘できるのではないだろうか。もちろんこれら任侠系団体においてもホモエロティシズムはしばしばみられていくが、ドイツ青年運動が中産階級の青年たちによる同階級がもつ諸規範への抵抗であり、脅威であるところから対し、日本における青年運動の大きな担い手であった任侠系団体は、中産階級の外部に最初から位置づけられるのであり、同階級の性規範を含む諸規範を、内部から揺るがすものとしてとらえられることが、少なかつたと考えることができるのではないだろうか。

また、少なくとも植民地開拓農業移民においては、青年運動的役割を果たしたものは満蒙少年義勇隊であり、彼らは成人後は妻を娶って家族農業の経営者となることが自明視されていたことも、付け加えておかねばなるまい。終わりの明確な定めなきドイツ青年運動においては、宗教的禁欲主義と結びついたホモソーシャルもまた終わるときの明確な定めを持たず、ヘテロセクシュアルな家族形

成への水脈づけもなされていなかった。それに対してヘテロセクシュアル規範に回収されることが自明視されていた満蒙少年義勇隊では、彼らのホモソーシャルは成人する前の一時的な絆であり、ホモフォビアによって攻撃せずとも時期が来れば自ずと解体するものとみなされていたのである。

以上のように近代日本においては、ミソジニーはむしろホモソーシャルの確認を通じなければ構築に困難をとまなう都市新中間層の男性性と強く結びついていたのであり、また明治など近代初期よりも、大正末期から昭和初期にかけての(民族主義的)国家社会主義運動の高まりの中で、一度は包摂した女性を社会運動から排除していくイデオロギーとして機能した。しかしそのような社会運動の行動主義化・青年運動化に、宗教的禁欲主義と結びついたホモエロティシズムが明確に可視化されていない点に、ドイツやイタリアにおける青年運動との相違点があり、この点における今後のさらなる検討が今後の研究課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計4件)

海妻径子、植民地(主義)的男性性と父子関係、2017年6月18日、比較家族史学会、早稲田大学

海妻径子、昭和初期「右翼的」労働運動における家族主義とジェンダー 近代化・民族主義と男性性との関連分析に向けて、日本家族社会学会26回大会、2016年9月11日、早稲田大学

Keiko Kaizuma, The Lack of Father Role Models in Japanese Lower Middle Class during the First Half of the 20th Century, Focus on Fathers, Conference at University Wroclawski, 2015/9/4, University Wroclawski.

海妻径子、フェミニズム社会理論における「ヘゲモニー」概念の可能性、日本女性学会、2013年6月2日、広島県女性総合センター

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等  
該当なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

海妻 径子 (KAIZUMA KEIKO)  
岩手大学・人文社会科学部・准教授  
研究者番号：10422065

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし

(4)研究協力者

該当なし